

モリヤママ氏設計のメトロポリタン・
トロント・ライブラリー(建設中)。
(朝日新聞社米倉守氏撮影)

方は、近代建築運動の本質であって、何もカナダに固有のものと言うことはできない。しかし開かれた自由の大地に生活の場をきりひらいてきたカナダでは、この考え方は当然のこととして受け入れられたと云える。このことは、例えば日本のように歴史に根ざした慣習的な観念の多く存在する建築と較べると、その違いは明らかであろう。帰納的な方法によって設計された建築物は、一般に慣習に束縛されない実験的なものになることが多い。カナダの社会には、こうした実験的なアイデアを實現しているというバイオフィニア精神がまだ生きているようにみえる。モシェ・サフティがアビタの実験住宅を設計したのは彼が二十七才の時であり、ジョン・アンドルースがスカボロ・キャンパスを設計したのは彼が二十九才の時である。若い実験的なアイデアを許容し、

チーフやフォルムにその特徴がある訳でもない。この事のなかに、すでにある種の「カナダの要素」を感じることでもできよう。カナダの現代建築の特徴は、いわば設計のプロセスにあるのであって、モチーフやフォルムにあるのではない。

カナダの現代建築の第一の特徴として私があげたいのは、その帰納的な直截性である。帰納的な設計方法、つまり与えられた敷地、持たねばならない機能や意味、自然の条件などに基いて、最も適切な建築をそれぞれに応じて作ろうとする考え

をサポートする社会的背景があつて、はじめて帰納的設計方法が実を結んだのである。

第二の特徴としてあげたいのは、カナダの風土の反映である。気候温暖なバンクーバーは、美しい自然に恵まれ、土地も丘陵地が多い。戸外スペースを建物の中にとりこみ、自然と一体化した建築を作ることが可能になる。これと対比的なのが、平原三州の風土であろう。地平線まで続く平坦な土地の上で、氷点下四〇度の冬を迎えるこの地域では、建築は文字通り人間の生活を守る城である。平原三州から東部にかけて冬の寒さの厳しい地方では、冬の生活を快適にするために公共的なスペースを暖房のある建物の中にとり込む傾向が生れてくる。スカボロ・キャンパスなど、カナダの新しい大学が建築としてユニークなのは、学生の通路や広場などが屋内スペースとして建物の中にくみ込まれていることによるところが多い。最近モントリオールにできたプラス・デ・ジャルダンやトロントのイートン・センターなどのショッピング・センターを中心とする複合建築には、巨大な屋内スペースが計画されている。

第三の特徴として、カナダの建築界の持つ国際性があげられる。カナダ文化の多様性がここにも現れているといつてよい。カナダ生れのカナダ人の建築家がだんだんと多くなってきたことは確かであるが、例えば前述したサフティはイスラエル生れ、アンドルースはオーストラリア生れである。また、数多くの建築家が、アメリカ合衆国、英国、フランスなどの大学で教育を受け、またこうした各国の建築家がカナダの大学で教鞭を執っている。世界の二大国際語を国語とするメリ

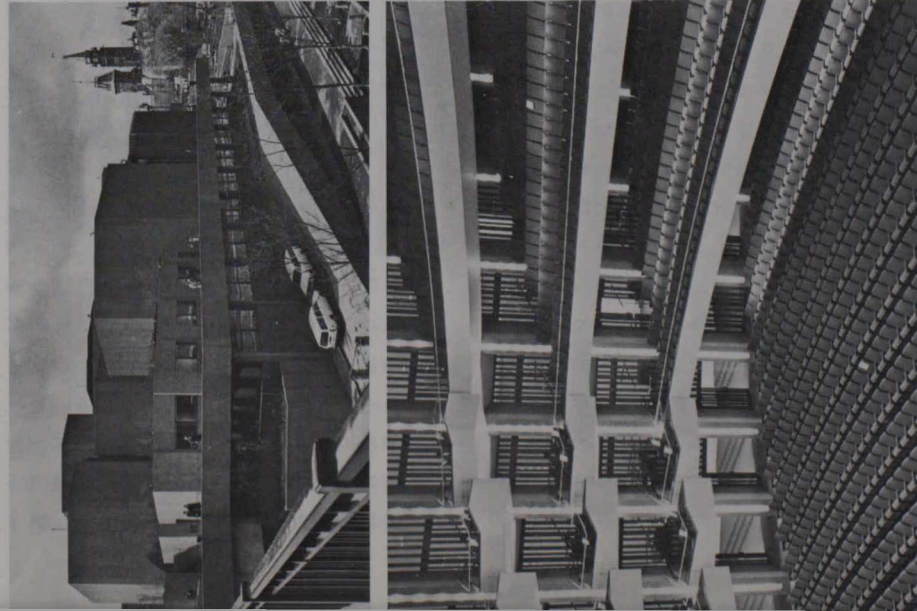
ットはこうした面にも現れている。

第四に注目したい点は、カナダの町づくりに見られる。モータリゼーションの急速な発展により、住民の郊外移住がすみ、都心部の疲弊が大きな社会問題になったのは一九六〇年代初めのことであった。この反省として都心部の再生に力が注がれ、モントリオールとトロントには地下鉄が建設された。都市再開発も各地ですすめられ、最近では特に古い建物を生かしながら再生をはかる、いわゆるリハビリテーションが各地で行われている。バンクーバーのガスタウンとよばれる地区の再開発は、古いレンガ造りの工場の架構などを生かしながら街に生氣をよび戻したプロジェクトとして成功している。個々の建築家が互いに「けん」を競うのではなく、人間生活の中心としての都市の中におけるひとつの要素として建築を考える姿勢が、ここにうかがわれる。特にバンクーバーやモントリオールの都心部は、とつびな建築もなく、市民生活との調和を考えた建築が数多く存在し、全体

として極めて水準の高い環境を形成している。これは、無計画にたまたまそうなったのではなく、それぞれの都市の建築家や都市計画家の、多年にわたる努力の結果であると思なくてはならない。

オイル・ショックにはじまった経済発展のペースダウンによつて、カナダ経済もまた深刻な影響を受けている訳であるが、これによつてもたらされた建設活動の停滞が、長期的にカナダの建築界にどのような影響を与えるか気にかかるところである。やや予想屋めくが、私個人としては、個々の建築については従来にくらべて多少保守的な傾向が強くなるものの、都市の中における建築のあり方について新しい局面が開けてくるのではないかと思つている。先年行われたレジヤイナ市の国際都市開発コンペティションでは、私たちの作品が第二位に入選したが、その時の体験から考えても、都市建築のあり方について市民の関心は高まっていると思う。

(筑波大学社会工学系助教授)



国立芸術センター(オタワ)とその内部